

# 奥義抄の眞福田丸（智光）事と古本説話集の著作年代

高 橋 貞 一

の如く述べてゐる。

一  
日本靈異記卷中、智者誹妬變化聖人而現至閻羅關受地獄苦緣第七に、  
釋智光者、河内國人、其安宿郡鋤田寺之沙門也、俗姓鋤田連、後改  
姓上村主也、母氏飛鳥部造也、天年聰明、智惠第一、製孟蘭陁、大  
般若、心般若等經疏、爲諸學生、讀傳佛教、時有沙彌行基、俗姓越  
史也、越後頸城郡人也、母和泉國大鳥郡人、蜂田藥師也、捨俗離  
欲、弘法化迷、器宇聰敏、自然生知、內密菩薩儀、外現聲聞形、聖  
武天皇、感於威德故、重信之、時人欽貴、美稱菩薩、以天平十六年  
甲申冬十一月、任大僧正、於是智光法師、發嫉妬之心。  
とあつて、智光が行基を誹りて、吾は智人、行基はこれ沙彌といひ、  
鋤田寺に籠りて、一箇月程經て病死し、閻羅王の使が至り、行基を誹  
つた罪によつて、地獄の苦しをうけ、九日にして蘇生し、行基菩薩に  
會ひて懺悔するといふ説話である。三寶繪詞卷中にはこれを簡略に述  
べ、本朝法華驗記卷上、第二、行基菩薩にも同じ事を傳へてゐる。今  
昔物語卷十一、行基菩薩學佛法導人語第二には、以上の説話の外に次

此ノ行基菩薩ハ、前ノ世ニ、和泉國大鳥郡ニ住ケル人ノ娘ニテ御ケ  
リ。幼稚也、祖父母、是ヲ悲ミ□スル事無限。而ニ其家ニ仕フ下童  
有リ。庭ノ糞取棄ル者也、名ヲ眞福田丸ト云フ。此ノ童、心ニ智有  
テ思ハク、我、難受人身ヲ得タリト云ヘドモ、下姓ノ身ニシテ、勸ル  
事無クハ、豈後ノ世ニ頼ム所有ジ、然レバ、大ナル寺ニ行テ、法師  
ト成テ佛ノ道ヲ學バムト思ヒ得テ、先ヅ、主ニ暇ヲ請ヘバ、主ノ云  
ク、汝ハ何ノ暇ヲ申スゾト、童ノ云ク、修行ニ罷出ムト思フ本ノ心  
有リト、主ノ云、實ノ心有ラバ、速ニ免ムト云テ、免シツ。但シ年  
來、仕ツル童也。今修行ニ出ム剋ニ、水干袴着セテ遣セト云テ、忽  
ニ水干袴ヲ令調ルニ、此ノ幼キ娘有テ、此ノ童ノ修行ニ出ヅル料  
也。功德ノ爲也ト云テ、此ノ片袴ヲ繼テケリ。童此ヲ着テ、元興寺  
ニ行テ、出家シテ、其寺ノ僧ト成ヌ、名ヲバ智光ト云フ。法ノ道學  
ブニ、極テ止事無キ學生ト成ヌ。彼主ノ幼カリシ娘ハ、此ノ童出デ  
後、幾クシ無テ、 益無テ止ヌ。其後、其娘同國ノ同郡  
ノ 。

とあつて、智光の出家譚がある。ここに和泉國大鳥郡に住んだ人の娘が登場する。

次に、  
而ニ菩薩、未ダ幼キ少僧ニハ在マシケル時、河内國ノ□□郡ニ法會ヲ修スル事有ケリ。智光ハ、止事無キ老僧ニテ有ケルヲ、其講師トス。元興寺ヨリ行テ、其講師トシテ高座ニ登テ、法ヲ説ク。聞ク人、皆心ニ染テ、貴ブ事無限。説畢テ、高座ヨリ下ムト爲ルニ、堂ノ後ノ方ニ論義ヲ出ス者有リ。見レバ、頭青キ少僧也。講師、何計ノ者ナレバ、我ニ對テ論義ヲセム爲ナラムト疑ヒ思テ、見返タルニ、論義ヲ出様、

眞福田ガ修行ニ出デシ日藤袴、我レコソハ縫ヒシカ片袴ヲバト。其時ニ講師大ニ嗔テ、少僧ヲ罵テ云ク、我、公私ニ仕ヘテ年來ヲ經ルニ、聊ニ恙無シ、異様ノ田舍法師ノ論義ヲセムニ、不吉ヌ事也、況ヤ、我レヲ罵ル事、極テ不安ヌ事也ト云テ、怒々出ヌ。少僧ハ打咲テ、逃テ去リニケリ。少僧ハ行基菩薩也ケリ。智光、然計ノ智者ニテハ、罵ト咎ムマジ、暫可思廻キ事也カシ。思フニ、其罪モ有テム。(岩波古典大系本三、六一頁)

と述べて、片袴を縫つたのは行基であると物語つてゐる。日本靈異記に比して、智光と行基の關係に新しい説話が生じたことが注目せられる。

## 二

ここに更に注目すべきは藤原清輔の奥義抄卷八の記事である。日本歌學大系第一卷の奥義抄によれば次の如く述べてゐる。

十一 問云、せりつみしむかしの人と云ふ古歌を、あるは後のせりめしけるを、庭はく者、おのづから見たてまつりて、思ひに成りて、めし物也とて、芥をつみて、佛僧などに奉りし事のある也といへり。或は獻芹と云ふ本文の心也など申すは、いづれにつくべきぞ。

答云、いづれとさだめがたし。但、或人のかたりしは、むかし大和國に猛者ありけり。いへには山をつき池をほりていみじきことゞもをつくせり。門まもりの嫗のこなりけるわらはの、まぶくた丸といひけるありけり。池のほとりにいたりてせりをつみけるあひだ、猛者のいつきの姫ぎみ出てあそびけるを見てより、このわらは、おほけなき心つきてやまひに成りて、その事となくふせりければ、母あやしみてゆゑをあながちにとひければ、わらはは此よしをかたるに、すべてあるべきことならねば、わが子のしなんずる事をなげくほどに、はゝも又病にふしぬ。その時かの家の女房此をうなのやどりに立ちいれりけるに、ふたりのものゝやみふせるを見て、あやしみてとふに、おうなのいはく、させるやまひにあらず。しかゞのことのはべるを思ひなげくによりて、親子しなむとする也といふ。女房わらひて此よしを姫君に語るに、姫君あはれがりて、やすき事也、はやくやまひをやめよといひければ、わらはも親もかしこまりよろこびて、おきて物くひなどして、例のごとくになりぬ。姫君のいふやう、忍びて文などかよはさむに、てかゞざらむくちをし。手をならふべし。わらはよろこびて一二日にならひつ。又いなく、我父母死なむことちかし。其後は何事もさたせさすべきに、もじ知らざら

むわろし、學問すべし。わらは學問して（物）見あかすほどになりぬ。又いはく、忍びてかよはむに、わらは、見ぐるし、ほうしに成るべし。すなはちなりぬ。又いはく、そのことゝなきにほうしの近づかむあやし。心經、大般若などをよむべし。いのりせさするやうにもてなさむと云ふにしたがひてよみつ。又いはく、なほいさゝか修行せよ。護身などするやうにて近づくべしといへば、修行にいでたつ。姫君あはれみて、ふちのはかまを調じてとらす。かたばかまをばみづからぬひつ。是をきて修行しありくほどに姫君かくれにければ、そのよしきゝて、道心をおこして、偏に極樂を願ひて、たふときひじりにてうせぬ。弟子ども後の事に行基菩薩を導師に請じたるに、禮盤にのぼりていはく、まぶくた丸がふちばかまわれぞぬひしかたばかまといひて、かねうちてことゞもいはでおりぬ。弟子あやしみてとひければ、亡者智光はかならず往生すべき縁ありしものゝ、はからざるに世間に貪着して惡道にゆかむとせしかば、わが方便にてかくはこしらへ入れたる也となむ有ける。姫君は行基の化身、行基は文殊也。まぶくた丸は智光なり。智光頼光とて往生したるものは是也。是はかきたることにてもあらず、人の文殊供養じける導師にて仁海僧正のゝたまひける也。さて、

せりつみしむかしの人のわがごとや心にものゝかなはざりけむといふ歌を詠じて、此歌はこの心をよめる也となむのたまひける。とある。右の文で、最後に、「是はかきたることにあらず、人の文殊供養しける導師にて、仁海僧正のゝたまひける也」とあるのによれば、口づからの説話の如く考へられるのであるが、この文に極めて類

するのが次の古本説話集卷下の説話である。左にその文を示せば、いまはむかし、やまとの國に、長者ありけり。家にはやまをつき、いけをほりて、いみじきことゞもをつくせり。かどまぼりりの女のことなりけるわらはの、まぶくたまろといふ、ありけり。はる、いけのほとりにいたりて、せりをつみけるあひだに、この長者のいつきひめ君、いでてあそびけるをみるに、かほかたち、えもいはず、これをみてよりのち、このわらは、おほけなき心つきて、つみにやまひになりて、その事となく、ふしたりければ、はゝあやしみて、そのゆへを、あながちにとふに、わらは、ありのまゝにかたる、すべであるべきことならねば、わが子のしなんずる事をなげくほどに、はゝも又やまひになりぬ。そのとき、このいゑの女房ども、この女のやどりにあそぶとて、いりてみるに、ふたりの物、やみふせり、あやしみてとふに、女のいふやう、させるやまひにはあらず、しかじかのことの侍を思ひなげくによりて、をやこ、しなんとするなりといふ。女房わらひて、このよしをひめ君にかたれば、あはれがりて、やすき事也。はやく、やまひをやめよといひければ、わらはも、親も、かしこまりて、よろこびて、をきあがりて、物くひなどして、もとのやうになりぬ。ひめ君いふやう、しのびて、文などかよはさむに、てかゝざらん、くちをし、てならふべし、わらはよろこびて、一二日にならひとりつ。またいはく、わがちゝ、しなむこと、ちかし、そのゝち、なに事をもさたせさすべきに、もんじらはざらん、わろし。がくもんすべし。わらは、又、がくもんして、物みあかすほどになりぬ。又いはく、しのびてかよはんに、わらは、

みぐるし。ほうしになるべし。すなはちなりぬ。又いはく、その事となき法師のちかづかん、あやし。心経、大般若など、よむべし。

いのりせさするやうにもてなさんといふに、いふにしたがひてよみつ。又いはく、なをいさ、かす行せよ、御しんするやうにて、ちかづくべしといえ、又修行にいでたつ。ひめ君あはれみて、ふちばかまをてうじて、とらす。かたはかまをば、ひめ君身づからぬいつ。これをきて、修行しありくほどに、このひめ君、はかなくわづらひてうせにけり。かくしめぐりて、いつしかとかへりたるに、ひめ君、うせにけりとくに、かなしきことかぎりなし。それより道心ふかくおこりければ、ところへおこなひありきて、たうとき上人にてぞをはしける。名をば、智光とぞ申ける。つみに往生してけり。あとにでしども、のちのわざに、行き菩薩をだうしにしやうじたてまつりけるに、らいばむにのぼりて、まふくたまろがふちばかま、我ぞぬいしかたはかまといひて、ことくもいはで、をり給にけり。でしどもあやしみて、とひたてまつりければ、まう者、智光、かならず往生すべかりし人也、はからざるに、まどひにいりにしかば、我はうべんにて、かくはこしらへたる也とこそ、たまひけれ。行きぼさつ、この智光をみちびかんがためにかりに長者のむすめにむまれ給へる也けり。行きぼさつは、もんずなり、ままくた丸は、智光がわらはなり。されば、かくほとけ、ぼさつも男女となりてこそ、導びき給けれ。

右の傍點を附した語に多少の相違があるが、これは奥義抄が恐らく古本説話集によつたものと認むべきであらう。とすれば、古本説話集

の成立年代についても考ふべき根拠が得られたものではあるまいか。奥義抄の成立については、日本歌學大系第一巻に詳しい解説を載せてゐるが、それを要約した和歌文學大辭典によると、

本文文中、金葉集を挙げ詞花集には觸れない。したがつて成立は天治元(1124)ないし天養元(1144)の間と思われる。三巻。なお定家の三代集事及び僻案抄には、初め崇徳天皇に奉り、のち追記補入して二條天皇に奉つた由が見え、第一次本は崇徳天皇在位中、ほぼ保延年間には成つていたらしい。初稿以來數回にわたる増補の跡が見られるが、初稿本と目されるものは現存しない。第二次本系統に傳顯昭筆前田家本、三手文庫本、第三次本に九條家旧藏久曾神昇藏本、豊橋市立圖書館本、歌學大系本、第四次本として流布の慶安五年版本(歌學文庫本)がある。

とみえる。これによれば略崇徳天皇の保延年間を下るまいとなり、したがつて古本説話集の成立は、更にそれ以前と認むべきである。さて藤原清輔の生歿年時は、長治元年(1104)―治承元年(1177)六月二十日歿、七四歳で、保延元年は三十二歳である。三十歳前後で古本説話集中の説話を採つたものと推定できよう。もし古本説話集によらなかつたとすれば、仁海の物語によつたこととなる。仁海は、長保二年(1000)八月傳法阿闍梨に補せられ、長和三年(1014)四月東寺凡僧別當、寛仁二年(1018)六月、大旱に際して勅を奉じて神泉苑にて雨を祈つて験があり、八月に權律師に補せられ(六十六歳)、長元二年(1029)六月東大寺別當、四年東寺一長者、長曆二年(1038)六月祈雨、験ありて九月僧正、時に八十六歳、長久四年(1033)九月東寺一長者、金

剛峯寺座主、永承元年（1096）五月十六日寂した。年九十三（六）といふ。東密小野流の始祖である。仁海の物語つた年時を永承元年五月以前とすれば後冷泉天皇の御代以前で、清輔の保延年間（1120—1123）を遡ること七十年以上に及ぶので、その間にこの説話が傳承せられ、今昔物語には参照せられずして、古本説話集に載せられ、或人によつて清輔に語られたと認められる。

### 三

以上、今昔物語、奥義抄、古本説話集の比較によつて、古本説話集は、今昔物語の説話を更に數歩進展させた跡があつて、今昔物語成立以後と考察すべきであらう、とすれば、古本説話集は今昔物語と奥義抄の中間に成立したものといはざるを得ないのである。岩波文庫本の川口久雄博士の解説に加ふる所があれば幸甚である。なほこの説話は袖中抄や私聚百因縁集にも奥義抄によつて加へられてゐて衆知のものであることを書き添へておきたい。